Л.М.Рейнус

『カラマーゾフの兄弟』におけるグルーシェニカのプロトタイプについて

『カラマーゾフの兄弟』におけるほかの主人公達とは違って（ドミートリー，フョードル・パープロヴィチ），今までグルーシェニカのモデルとなったプロトタイプは明らかにされてこなかった。作家の娘であるЛ.Ф.Достоефская は,「美しいグルーシェニカは―若い田舎の女性であって, 私の両親達はスターラヤ・ルッサで彼女を知ったのだった」（Грушенька Меньшова がこの田舎の女性であり，ドストエフスキーのスターラヤ・ルッサの妻に送られた手紙の一つの中で，回想されている。）しかしながら彼女の文章で言われていた事の裏づけに関して判断を下すことが出来る資料ではなく, А.С.Долинин はそれを疑問視している。

１８７２－１８８０年の間のスターラヤ・ルッサでのドストエフスキー滞在のとの関連性のある資料の研究に際して，著者は Грушенька Меньшова に関して，Л.Ф.Достоефская による意見を証明するような新しい情報を明らかにしたい。詳しく説明すると，これらの情報はロシア文学大学の中に保存されている А.П.Орловая から А.Г.Достоефская への手紙にある。同時にメニショバを良く知っていた，中世ロシアの古老達をも探し出す事に成功した。それは А.И.Мосина（１８７８生まれ）と Е.П.Семенова（１８８５生まれ）と М.В.Красавин（１８８９生まれ）である。А.И.Мосина は，著者に対する手紙の中で，この一節を知らせてきた。「Грушенька Меньшова を私は知っていました。彼女は私の両親の昔からの知り合いでした。」Е.П.Семенова は，１９０９年に，その頃から古老たちの間で，家族のように顔馴染になったメニショバの家の中をのろのろと歩いていた。М.В.Красавин は，全人生をメニショバの住居から遠くないところで過ごした（現在も過ごしている）。個々の事実はノブゴロド県新聞や他の起源から汲み取られている。メニショバのよく知られた部分に関する情報は，彼女からの А.Г.Достоефская への手紙が与えてくれた。これらの全ては大体の点において，Грушенька Меньшова の伝記を叙述する事や，現在まで保存されている彼女の家の所在地を突き止めることを可能にするものだ。

Грушенька Меньшова は１８４９年に生まれた。彼女の両親は，退役した二等大尉である Иван Афанасьевич Меньшов と，彼の妻の Дадья Кузьмичина であった。興味深い事は，１８６４年のスターラヤ・ルッサにおける自治会の選挙の街の投票者の名簿に，夫ではなくて妻の名前が載っていることである。退官した二等大尉が，何らかの理由で財産を持っている裕福な町人の娘（貴族ではない）と結婚したことが予想に浮かぶ。妻の持参金は，恐らく夫に自己所有の企業を開く事を可能にし，１８６８年の県会選挙の権利を持つ中世ロシアの住民の帳簿に，二等大尉である Иван Афанасьевич Меньшов 自身が名を連ねた。ある商売におけるしきたりに従って彼は狩猟免許証を持っており，その流通資金は６０００ルーブル以上だった。その後，成功が伴い，５００デシャテーナの土地を持つとても裕福な地主となった。彼は約１８７５年に死んだ。А.П.Орловая の手紙でただ，Грушенька Меньшова の母親の事だけが回想されている。ノブゴロド県新聞では，Дадья Кузьмичина が二等大尉の未亡人として知られていた。

スターラヤ・ルッサの А.К.Грибба のダーチャで暮らしていたドストエフスキーたちは Грушенька Меньшова と，Арександра Павловна Орлова を通じて親しくなった。彼女は А.Г.Елисеева の友人であり，ダーチャの女主人の親戚であり，結果としてその相続者となった。

Орловаは，カスピ海の連隊の中尉とГрушенька Меньшоваが関係しているロマンの中でも最も生き生きとした参加をしている。Орловаの手紙で明らかなように，Грушенька Меньшоваと中尉との関係は，１８７５年には明らかに遠のいている。Грушенька Меньшоваは，自分の未来の幸福を信じている。「一つの戦争だけが障害物になるかもしれない。」Орловаは書いている。問題は,「Грушенька Меньшоваが自分の挑戦者の嫁に行く事であり，目下のところ彼は，彼の家に住んでいて，家を買ってあげようとしたり，彼が夏にここにいたときにはその購入先を探していた姉を満足させていない。」Орловаは А.Г.Достоефскаяに年初めに伝えている。適当な機会はА.К.Грибба の死後に現れた。А.Г.Елисеева は，１１５０ルーブルで家を売却している。いかなる理由で中尉が А.К.Грибба の家を買わなかったかは明らかにされていない。その家はドストエフスキーによってА.Г.Елисеева が決めた価格で獲得された。

１８７６年になっても，Грушенька Меньшоваに期待していた幸福はもたらされなかった。彼女のペテルブルグへの出発後間もなくして婚約者からの手紙は到着しなくなった。絶えず彼を愛していたГрушенька МеньшоваはА.Г.Достоефскаяに助けを求める手紙を書いている。

「親愛なるАнна Григорьевна！あなたの私に対するありがたい好意を知った上で，すてきなあなたにお願いがあります。実はペテルブルグからの到着後私は重い病気になってしまって，その病気の間に私の婚約者からたった一つの手紙を受け取ったきりで，その手紙もとても悲しいものなのです。―彼もまた病気で，ベッドでこれを書いていて，入院しなければならなくて，その後は，私は彼に何があったのかどうか，生きているかどうか，それさえもわからないんです。そこで，いとしい人よ，私のために，もしよければ，最もつらい真実も，私にとっては何もわからないよりはましです。彼の住所は以下のとおりです。クロンシタット，カスピ海連隊，Иван Васильевич Кроваикйн，恐らく中尉です。」

А.Г.Достоефская は，Грушенька Меньшова の願いを果たしている。情報をもたらしたのはДостоефскаяの従兄弟の兄弟のА.Н.Сниткинであった。心配されていた中尉は,生きていて元気であり，書き付けを送っている。そこには「下に署名されている，あなたの恭順な僕は，なぜ連隊の管理局に私の住居に関して情報を得ようとした，Александр Николаевич Сниткин氏の関心を得ているのかということに関して通知させていただきたい。」このГрушенька Меньшоваと中尉との関係は，見たところ，終わってしまった。その後の年も，彼女の姓はМеньшоваのままだった。

思いやりをもって彼女と関わったドストエフスキーにとっては，Грушенька Меньшоваはその後も良い知り合いだった。１８７９年の夏，А.Г.Достоефская は，風光明媚な場所として知られているСтолбенский島のСелигер湖にあるНилова修道院に子供達と共に集まった。メニショバも行きたくなった。事は決まった。「Грушенька Меньшова の訪問を，Нилова 修道院への旅行の前置きとしたい。」ドストエフスキーはЭмсから書いている。

Грушенька Меньшоваのその後についても短く書いておこう。中尉との成功に終わらなかったロマンの後，彼女は１８８２年にスターラヤ・ルッサに分宿しているВильмандстранский連隊の二等大尉であるпетрпетрович шерと結婚した。結婚は長く続かなかった。１８６６年に夫は死んでしまった。長く奔走した後，未亡人はそのお金でつつましく暮らしていけるだけの少なからぬ年金を得ている。間もなくして彼女のたった一人の姉が死に, Меньшова-шерはあまりうまくいっていない古儀式派の母親と未亡人のまま取り残された。生活は深刻になった。孤独が彼女を苦しめ，物質的な苦労が多くの奔走の原因となり，

虚無や人生の見通しが立たない事が落胆の原因となった。１８９３年３月２９日彼女はА.Г.Достоефская に宛てて書いている。「一つの救いが問題や心配事の中にもあるべきで，義務的な職務だけが私を救いうるのです。そうでもないなら私はもう生きていけないと本当に思うのです…人生の力や魂の灯火がまだ消えきっていないというのに，自分の人生に対する意味を見つけ出せずに，誰に対しても役に立てずにいて，狂気に近い状況にさえなっています。どこか，養護施設でも子供達のところでも，病人の心配でも何でもいいから私には必要なのです，親愛なる Анна Григорьевна…。」私は，この時いかに Достоефская が自分の古いロシアの友人を救う事ができたかについては知らない。それを自分の力で見つけたのかもしれなかった。長い間彼女の人生は，１９０９年に Меньшова-шер が５２年間すみつづけていた自分の家を売ったということしかわかっていない。恐らく，彼女は１９１０年に死んだのであろう。人生の最後の年まで Меньшова は，自分の被後見人と思いやりをもって対応していた Достоефская と文通をしていた。彼女の夫が死んだ後，Достоефская は彼女が年金に奔走するのを手助けしたり，物質的な援助を与えたり，助言を送ったりしていた。Достоефская 付けになっている手紙は，愛や，感謝の念や，尊敬の念の表現にあふれている。

Грушенька Меньшова と，『カラマーゾフの兄弟』におけるグルーシェニカとを比較してみよう。長篇の中では，グルーシェニカは，「まだ１７歳だった頃に何処だかの将校だったらしい誰かに騙され，その後すぐに捨てられている。」Грушенька Меньшова は誘惑され，その将校であり中尉である男に期待を裏切られた。家族とは二つの出来事で葛藤があった。「私を親戚がぼろ屋から追い出したのよ」―ドミートリー・カラマーゾフの裁判でグルーシェニカがこう言っている。Грушенька Меньшова は，どうやら自分の娘の誘惑者を見破っていた母のことを我慢しなければならなかった。「Грушенька は，分離派の自分の母の呪いに苦しめられ，それを隠していた。」―Орлова は，それを伝えている。「分離派の母の，鋸引きや，呪いや，恐ろしい行いが，哀れな子どもを殺してしまったのです。」別の手紙でもそれを読むことが出来る。問題は，病気にかかってしまった Грушенька Меньшова を診療していた医者が，彼女の母を「もし，これ以上病人に窮屈な思いをさせたならば，ほかのアパートに引っ越させる」と脅さなければならないほどまでに至ってしまった。

小説では，グルーシェニカは，Соборныи 通りに住んでいて，つまりは大聖堂 Собор に近い。中世ロシアの Грушенька も大聖堂に遠くない，Соборныи 区域の，大きくはない 2 回建ての石造りの家に住んでいた。

外面的な要因のほかにも，明らかに Грушенька Меньшова には心理学的性質である内面的な特徴に作者の関心が残されており，後になって小説のヒロインのモデルを創作するために利用された。これは何よりもまず，キャラクターの非凡さであり，強烈な感情の能力であり，おとしめる事の出来ない善良さは，人生の経験を経ている。作者が自分の作品のヒロインに，プロトタイプと同様の名前をつけていることに何ら不思議はない。

「カラマーゾフの兄弟」の中のグルーシェニカのモデルは彼のプロトタイプと比較してみると，小説の社会哲学的な内容に従っている新たなる点によって豊かになっている。ここではグルーシェニカは，金が支配している自己の世界に自信を持っており，「金を溜め込む」自らの才能と，自らの個人的な能力による，カラマーゾフの父親と息子が感じていた権力がある。作家は不幸に襲われたドミートリー・カラマーゾフ

への愛の輝きの下で起った，ヒロインの精神的な生まれ変わりのモチーフを持ち込んでいる。どこかの誘惑され，騙された女性の悲劇が，ドストエフスキーがグルーシェニカのモデルを創作する基礎と，小説で語られるのほかの登場人物たちとの彼女の関係の基礎となっていて，全ての要因を決定している基本となっている。プロットは若い田舎の女性の自伝から借用されており、彼女の運命にドストエフスキーは活き活きと参加した。

興味深い事に，当時のノブゴロド県新聞には，「カラマーゾフの兄弟」の中で、グルーシェニカのパトロンであった人物と同姓同名のクジマ・サムソーノフについて触れられている。明らかにこの登場人物のモデルにはドストエフスキーの何らかの古い印象の跡がある。

「カラマーゾフの兄弟」の小説の創作の歴史は，大体においてスターラヤ・ルッサと結びついている。１８７４年にドストエフスキーはペテルブルグには去らずに、冬のスターラヤ・ルッサに留まった。１８７４年９月１３日に，作家は恐らく完全に，「未成年」の執筆に没頭していたが，未来の「カラマーゾフの兄弟」の創作メモも行なっている。生じた構想はこっそりとひとりでに周囲の出来事からすくい出されて，内容が富んで，徐々に発達していった。１８７２年からスターラヤ・ルッサで生活していたドストエフスキーは彼女を好きになった。この、あまり大きくない地方の年の住民を興奮させていた出来事に彼は通じていた。そして，彼の目に飛び込んできた Грушенька Меньшова と，中尉とのロマンは，もう一つの地方の町である Скотопригоньевские にいる登場人物の創作の基礎とよく似ているようだ。

以前に指摘されていたのが、「カラマーゾフの兄弟」において，スターラヤ・ルッサの描写が存在するという事だった。今回の情報は，スターラヤ・ルッサの生活の影響が，これまで主張されてきたよりも，より広く利用されているということを明らかにするものだ。

Л.М.Рейнус.　О проттире Грушеники из 《Братьев Карамазовых》
Русская литература / Институт рус. литературы, А.Н. С.С.С.Р. - 1958, no. 4 (1967)-. - Ленинград : Изд-во Академии наук СССР , PP143-146.